

市史だより

がちまやあ Gači-majaa

第10号・2006年9月29日(金)発行

年3回 (5・9・1月発行)

編集・宜野湾市教育委員会文化課 市史編集係

〒901-2203 宜野湾市野嵩1-1-2

問い合わせ・情報提供先

☎ ? (? ☎ ? ☎

☎ (098) 893-4431

Fax (098) 893-4434

Kyoiku08@city.ginowan.okinawa.jp



戦後移民出港の様子(1959年)

1899(明治32)年、沖縄県初の海外移民が那覇港から出発し、26人の県出身者がハワイの地に降り立ちました。当時の沖縄は経済的にも非常に苦しく、また全県的に飢餓がおこり、「ソテツ地獄」と呼ばれる時期でした。そんな中、遠く海外で一攫千金を夢見て多くの人びとが旅立っていきました。宜野湾出身者の移民は1904(明治36)年普天間村の男性がハワイへ渡り、その翌年には57人、1906(明治38)年には100人の宜野湾出身者がハワイへ渡航しました。

1935(昭和10)年までに4万2,669人(宜野湾出身移民は1,019人)の県出身者が海外で働くようになり、少ない稼ぎの中からも故郷沖縄に多額の送金が送られ続けました。ハワイの他にも遠い南米ブラジル・ペルーやフィリピンなどにもウチナンチュは旅立っていきました。

そんな移民の歴史を持つ沖縄。2006年の今年、ペルー移民100周年です。10月12日(木)から15日(日)、第4回世界のウチナンチュ大会が開かれます。5年に1度のこの大会は、過去3度にわたり多くの日系2世・3世の方々が故郷沖縄を訪れます。宜野湾市でもウチナンチュ大会に合わせ10月14日(土)に、宜野湾市出身の海外参加者を招き、沖縄の郷土郷里や伝統芸能の余興などで親睦を図ることを目的に、「世界のジノーンチュの夕べ」を開催します。

2006年〇〇の秋!?

暑かった夏が過ぎ、10月を迎えました。季節は秋ですね。秋と言えば、読書の秋、食欲の秋、芸術の秋…などとたくさんの“秋”が思い浮かびます。みなさんはどのような秋がお好きですか？また「今年の秋はこうしよう！」というように考えている方もいらっしゃるかもしれませんね。

今回はいろいろな“秋”の中から、スポーツの秋に注目したいと思います。



ジノンウマイー（宜野湾馬場）

☆運動会の季節☆

スポーツの秋といえば、誰もが経験したことがある、運動会の季節ですね。現在は学校の運動場や市民グラウンドで行われていますが、大正半ばまでは主に宜野湾にあった馬場で行われました（写真左）。運動会は地域ぐるみで参加し、各字対抗の青年競技もあり、日が暮れるまで行っていました。

また部落間の対抗意識も強く、審判に抗議を申し込むことが多々あったそうです。

1957（昭和32）年12月には、普天間総合グラウンド（現在の普天間高校と普天間小学校のグラウンド）が完成しました。同グラウンドでは、中頭地区陸上競技大会や、市民運動会などが開催されました。1964（昭和39）年に健康都市宣言をしていた宜野湾市は、1965（昭和40）年に開催された第一回市民運動会において、「丈夫な体を育てましょう」などの**のぼり**をグラウンド中に立て、“健康都市宜野湾”をアピールしました。また市民による仮装行列も行われ、大会を大いに盛り上げました。



第二回市民運動会の様子



ロボットの仮装



☆東京オリンピック☆

1964（昭和 39）年、アジアで初めてとなるオリンピックが東京で開催されました。日本女子バレーボールチームが「東洋の魔女」として一躍有名になった大会でもありますね。



東京オリンピックの聖火は、ギリシャを出発し、沖縄を経由して東京に運ばれました。そんな聖火は 1964 年 9 月 9 日に宜野湾市を通過しました。聖火のコースに選ばれた宜野湾市は前の年から美化運動を始め、準備に取り組んでいました。

宜野湾市にかかるコースは、現在の国道 330 号（当時は軍用道路 5 号線）を 4 区間（旧市役所前・上原・宜野湾小学校前・我如古）に分け、走者の伴走者として普天間高校生や市内中学生が聖火と共に宜野湾市を駆け抜けました。沿道には大勢の市民が集まり、日の丸の小旗を振って歓迎しました。



旧市役所前を通過する聖火

☆涼しくなった秋だからこそ！☆

かつては馬場や普天間総合グラウンドにおいて、市民総出で参加する運動会が行われていました。現在では 1981（昭和 56）年に完成した市立グラウンドで、子どもたちの体力の向上や学校間の友情を深めることを目的とした市内小・中学校陸上競技大会や、健康増進を目的とした^{あぎ}字対抗陸上競技大会が行われています。

東京オリンピックが開催された 10 月 10 日は、その後「スポーツの日（現在は 10 月第 2 月曜日・体育の日）」として制定されました。夏の暑さも落ち着き始め、涼しくなってきた秋の季節だからこそ、体を動かすことが快適に思えるのかもしれませんがね。



～破壊された滑走路～

■ 「防犯犯罪に関する書類」より

前々回『がちまやあ 第8号』の「役所移転の陳情書」では、1949（昭和24）年の村役所の移転問題について紹介しました。移転を訴える陳情書からは、現在とは違った普天間飛行場の様子うかがえました。さらに今回は、文化課所蔵「防犯犯罪に関する書類」を読みながら、戦後間もない頃の普天間飛行場と周辺住民との関わりについて紹介してみたいと思います。

■ 困惑する村役所

普天間飛行場は、1945（昭和20）年、米軍上陸後まもなく、日本本土攻略のための飛行場として建設されました。しかし、日本政府の降伏後は使われる理由がなくなったのか、飛行場には米軍の戦車の残骸などが捨てられていたようです。このように米軍機が離着陸するどころかフェンスもなく、“補助飛行場”として放置されていた当時の状況は、周辺に数々の困惑を招いていました。宜野湾村役所は、普天間飛行場が恒久的なものか、あるいは一時的なものかの判断がつきかねていたようです。

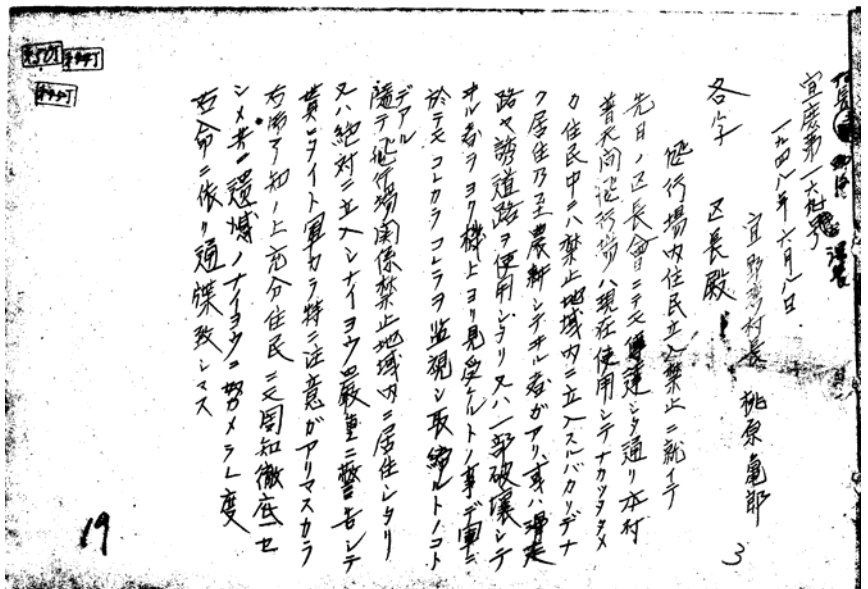
■ 破壊された滑走路

さらにこの頃、村役所を悩ませていた問題がもうひとつありました。周辺住民が飛行場の立入禁止地域の中へ頻繁に立ち入っていたためです。いくら“補助飛行場”であるとはいえ、住民が飛行場の中に立ち入ることは、軍によって禁じられていたので、役所もただちに対応を迫られました。

「防犯犯罪に関する書類」に綴られている「飛行場内住民立入禁止ニ就イテ」（資料）では、軍の注意を受け、村役所が飛行場禁止地域

へ住民が立ち入らないよう通牒しています。本文中に、「禁止区域

内ニ立入スルバカリデナク居住乃至農耕シテキル者ガアリ、或ハ滑走路ヤ誘導路ヲ使用シタリ又ハ一部破壊シテキル」とあるように、この文書には、飛行場に立ち入るばかりではなく、居住・農耕し、さらには滑走路をも破壊して生活を営む人びとの姿が記録されています。この記録からは、戦後初期の宜野湾の、日々の生き残りをかけた人びとの生活の一端を伝えています。これ以降も村には軍から通知されており、飛行場の中に立ち入る人が後を絶たなかったことがうかがえます。



資料

普天間飛行場は“現在使用シテナクッタ”と記録されています。

📌 展示会開催しました 🎵 📌

市史編集係では、去る6月19日(月)～30日(金)の2週間、写真パネル展「沖縄戦、そして伊佐浜の土地闘争—戦(いくさ)・基地・闘争—」を宜野湾市役所ロビーにおいて開催しました。このコーナーでは、展示会の様子について、振り返ってみます。

今回の展示会では、宜野湾における沖縄戦や米軍基地の建設の様子を追いつつ、1955(昭和30)年に伊佐浜で起きた米軍による土地接收、すなわち伊佐浜の土地闘争にみる人びとの抵抗や闘争のありようを^{など}辿りました。

来場者のアンケートでは、「伊佐浜の事件を忘れてはならないと思う」、「戦時中の状況に関する展示を取り上げてもらいたい」、「一枚一枚の写真に胸の痛みを覚えます」などのコメントをいただきました。

また、今回の展示会では、伊佐浜の土地接收の様子を撮影したという方から写真を寄贈していただきました。当時の伊佐浜の様子を知ることが出来る貴重な資料として、市史編集係で大切に保管し、活用していきたいと思えます。貴重な写真の寄贈、心から感謝いたします。



市役所ロビーでの展示会の様子。多くの方々がつめかけて下さいました。

ミニ展示会の開催!!



伊佐区公民館での展示会の様子。自治会長さんが体育館に資料を丁寧に展示して下さいました。

展示会終了後には、伊佐区自治会からの要望もあり、伊佐区公民館で「伊佐浜の土地闘争」と題したミニ展示会を開催することになりました!!自治会長さんが中心となって展示物を掲示し、7月末から8月上旬の約2週間、展示会を開催しました。展示物のなかには、接收された伊佐浜の家屋の写真22点も展示しました。伊佐区での展示会開催中には、区民の方々から、写真に写された家屋や人物に関する情報や、土地闘争についてご記憶されているの方々からのお話も寄せられたりと、貴重な情報を得ることが出来ました。

市史編集係で所蔵する資料を皆さまに提供し、それが地域の方々を受け止められ、新たな情報を引き出すきっかけとなりました。パネル展示会をご鑑賞^{かんしょう}下さいました皆さま、並びに情報を寄せていただいた伊佐区の皆さま、ご協力していただき感謝しております。本当にありがとうございました。

カー！



其ノ四 地下は水と生き物の通り道

これまでカー（湧き水）について、人と行事と儀礼、カーの形、カーにまつわる昔話を紹介してきました。今回は、カーの中で生活する生き物と、地下を通る水の道について紹介します。

■カーの中には、どんな生き物はいるの？

カーには場所によってグッピーやコンジテンナガエビ（写真下左）、モクズガニ（写真下右）などの小魚やカニ、エビがいます。また、森の中にあるカーには、ボウフラがいます（周辺には蚊もいるので、刺されないように注意！）。

これらコンジテンナガエビやモクズガニは、もともとこのカーで生活しているものではありません。彼らには、海（海水）と陸水（淡水）部分を行き来する性質があります。成長しながら稚エビ・稚ガニの頃に海からカーなどの陸水に戻ってきます。では、彼らはどうやってカーにやってきたのでしょうか？



コンジテンナガエビやモクズガニ、グッピーのいるクシヌカー（野嵩）。



カニ、エビたちは人の気配を感じると、すぐに隠れますが、しばらくすると出てきます（大山のヒャーカーガー）。

■地下を通る生き物

宜野湾市の台地は、大部分が比較的、水を通しやすい性質の琉球石灰岩りゅうきゅうせっかいがんできています。地下にしみ込んだ雨水は、土地の低い場所へと流れ、途中、カーとして湧き出たり、川や海に流れたりします。

地下は、しみ込んだ水の流れで少しずつ削られ、また相当の時間をかけて台地の変化の影響を受けて、洞窟や水の通り道ができてきます。カニやエビたちは、おもに稚エビ・稚ガニの頃に、この海に通ずる地下の水道や川の中（淡水）で生活しますが、中にはカーにたどり着き、そこで生活するのものです。



洞窟内の水のある場所やタイモ畑、川で生物たちを見ることが出来ます（写真はクマイアブ・字宜野湾）。

古地名調査スタート!

前号（第9号・5月発行）でお知らせしました「古地名調査」が始まりました。古地名とは、「その土地の人々に、古くから言い伝えられている地名」のことを言います。字宜野湾を皮切りにスタートです!!

調査では、1945（昭和20）年1・2月頃の空中写真をスクリーンに映し、話者の方々からお話を伺いました。話者の方々が子どもの頃に遊んでいた場所や、道、井戸や洞窟の名前、その由来などを中心に調査を行いました。右の写真のようにスクリーンに直接その場所を教えていただくこともあり、字宜野湾の地名について多くの情報を得ることができました。



字宜野湾での調査の様子



字宜野湾のゲートボール場

その後は聞いたことをふまえ、昔から今もなお残る場所に足を運び、現在の様子を確認します。字宜野湾にあるゲートボール場は、戦前マータクロウシナーという闘牛場でした。大雨が降ると、ウシナーから西側にあるウブガー（産泉）が泥水で汚れてしまうため、大正3年にウシナーを隣の神山との境界に移動させたという話があります。

さまざまな歴史を持つマータクロウシナーは、整地された後、2005（平成17）年5月7日にゲートボール場として生まれ変わりました。現在でも「まーたくろー広場」として区民の方々に親しまれている場所になっています。

去った沖縄戦や、戦後の都市開発によって宜野湾市は大きく変化しました。戦前の宜野湾の様子は今聞かなければ、もう知ることができなくなってしまう。今年度の調査は、宜野湾・神山・普天間・新城・安仁屋の5カ字を予定しています。みなさまのご協力を頂けますようお願いいたします。

大山の綱、福岡へ行く！

4月29日から6月25日にわたって、福岡県太宰府市の九州国立博物館で特別展「うるまちゅら島琉球」が開かれました。この特別展では、国宝の琉球国王の尚家関係資料を中心に、沖縄の歴史・文化・美術工芸が展示され、多くの見物客が訪れていました。この中で沖縄の祭の一つとして綱引きが紹介され、その代表に宜野湾市大山の綱引きで使われる綱とカナキ棒（貫棒）、旗頭が展示されました（もちろん本物です）。展示は、綱を引く前に行う雌雄の綱をぶつけ合うアギエーの様子が、再現されていました。

見物客も本土ではほとんど見られない沖縄の綱の大きさや、形に関心を寄せてい

ました。特にこの綱を使ってどのように引き合うのか不思議そうに眺め、共に展示された綱引きの映像を見て“なるほど〜”と感心しているようでした。

海を渡り本土で見る大山の綱は、沖縄で見ると雰囲気も違い、沖縄の民俗文化の奥深さをアピールしていました。



国立博物館ロビーに展示された大山の綱

地域史協議会に行ってきました。

去った8月11日（金）、沖縄県地域史協議会第一回研修会が沖縄市民小劇場“あしびなー”で行われました。この沖縄県地域史協議会は1978（昭和53）年、地域史編集関係者相互の情報と資料の交換・親睦を旨とするとともに、史資料の発掘・収集を推進し、市町村史（誌）等の地域史づくりの発展と地域文化の振興に寄与することを目的に設立されました。現在、地域史の編集に携わる関係機関は30余、個人での会員も60名余が加入し、お互いに情報交換を行い、地域の特色を活かした個性ある地域史編さんに取り組んでいます。

今回の研修会では、日本政府による三位一体改革や市町村合併等、近年の社会状況によって地域史編さんに与える（与えた）影響をふまえ、地域史を編さんする意義や、将来にむけて求められていることは何かを考えるため、「いま、あらためて考える、地域史編さんの意義」と題しシンポジウムが行われました。

各市町村で地域史を編さんする専門員は、身分が不確定な臨時職員・嘱託職員で多くを占めている状況にあることや、単に地域史を刊行するだけでなく、刊行後の活用の仕方について考えさせられました。



シンポジウムの様子